

## Tグループの発達過程に関する研究

—短大生のTグループでの懸念解消過程の分析—

津村 俊充 山口 真人

# Tグループの発達過程に関する研究

——短大生のTグループでの懸念解消過程の分析——

津村 俊充 山口 真人

## I 問 題

人間性教育のための革新的な教育技術として、Tグループをはじめとするラボラトリー法はアメリカを中心に急速に発達してきており、南山短期大学人間関係科での教育実践の中でも重要な位置を占めている。人間関係科で実施しているTグループの詳細は星野・山口（1979）にゆずるとして、ここでは簡単に説明するにとどめておく。

Tグループ（Training Groupの略称）は小集団活動の中で生じる人間関係を体験することを通して、自分や他者の理解、メンバー間の相互作用やグループのダイナミックスなどの理解を深めながら、人間相互のより真実な交流と信頼関係の実現を試みる場と言ってよいであろう。それは、通常の集団活動にはつきものの“やらなければいけない仕事”や“適切な進め方”“面倒を見てくれる人”などが決められていない状態（構造化されていない集団の状況）から始まり、各自の考えていることや相互作用の様子、グループの状態などをグループの中で検討してゆくことによって学習者自身が変化し、それによって集団が次第に変化（成長・発達）してゆく過程を体験すると言いかえてもよいだろう。それゆえTグループは、その中で個々のメンバーが学習する限りにおいて発達するものであるといえる。

---

〈付記〉本研究は多くの方々の協力に負っている。調査の実施に協力していただいた人間関係科6期生の皆さん並びにトレーナー、教員の方々には深く感謝の意を表します。またデータの分析に際しては南山大学電算機室（IBM4331）及び名古屋大学大型計算機センター（FACOM M-200）を利用した。

Bladford, L. D. (1963)は集団の発達過程を学習動機の観点から考察し、グループの初期には個人の自我防衛の動機、中期にはグループ形成と維持の動機、後期には自己成長と相互援助の動機が典型的に強くなり、集団発達に影響すると仮説した。この仮説は柏木(1969)や篠原(1974)によって個体防衛・グループ形成・相互啓発の3成分として実証的に確認されている。

Bennis, W. G. (1963)やGibb, J. R. (1963)はTグループに生ずる変化を、不確実さに由来する不安の低減過程として考察している。ベニスには特に権威と親密さとの不確実性に注目し、集団は権威関係の問題を解決(依存性の解消)した後、対人関係の問題解決(相互依存性の確立)に取り組むと仮説し、2相6段階の発達段階モデルを提示している。一方ギッブは、不確実性が、受容、データの流動的表出、目標形成、社会的統制の4領域に関する懸念としてあらわれると仮定し、これらの懸念低減の働きかけがグループの変化と成長を実現すると仮定した。

簡単に4つの懸念をまとめてみると、受容懸念は自分自身や他者をグループのメンバーとして認めることができるかどうかにかかわる懸念である。グループ形成の初期には特に顕著であり、お互いの間に「何者であるか」「自分はふさわしいか」といった恐怖と不信感が存在している。通常の集団では見せかけを装うことでもってこの懸念をかくしておこうとすることが多い。この懸念が表出され、グループの中で解消されると相互信頼が生まれ、自他の受容が可能になる。

データの流動的表出懸念はコミュニケーションに関連する懸念で、意思決定や行動選択をする時特に顕著にあらわれる。「何を感じているのか」「こんなことを言っても良いか」などのように、メンバーのものの見方、感じ方、態度などをコミュニケーションするさいの恐怖や不信感である。この懸念を解消すると人々は不適切な憶測で行動することをやめて、より適切なデータの収集と表出にたよって行動できるようになる。

目標形成懸念は生産性と関連しており、「グループが今やっていることがわからない」とか「やらされている感じがする」など個人やグループに内在する活

## Tグループの発達過程に関する研究

動への動機の差異にもとずく恐怖や不信頼に由来する。この懸念が解消されると、本来の動機にもとずいて行動し、課題への取り組みが主体的創造的になる。

社会的統制懸念は影響の及ぼしあいにかかわる恐怖と不信頼から生まれる。「誰かにたよりたい」「思ったとおりにできない」「規則にこだわってしまう」などがそれであり、この懸念が解消すると役割の分配が自由に適切に行なわれ、変更も容易になり、お互いが影響を及ぼし合いながら効果的に活動を展開してゆくことができるようになる。

以上の4つの懸念は非常に高い相互依存性を持っているが、しかし受容懸念の解消の度合いがベースになり、データの流動的表出、目標形成、社会的統制の諸懸念の解消が順に制約を受けるような懸念解消のヒエラルキーがあるという。

本研究はTグループの発達仮説の中でもグループ変数や組織変数との関連が豊富なギップの仮説の検証と同時に大学生のTグループにおける懸念解消過程の特徴などを検討することを目的とする。

## II 方 法

1 Tグループ実施内容 1979年、2月26日から3月3日(5泊6日)のほぼ一週間にわたり、本学の人間関係科の授業として、Tグループ合宿が実施された。

表1 各グループの構成人数

| グループ | 学 生 | トレーナー | 教 員 |
|------|-----|-------|-----|
| 1    | 10  | 1     | 1   |
| 2    | 10  | 1     | 1   |
| 3    | 10  | 1     | 1   |
| 4    | 10  | 1     | 1   |
| 5    | 9   | 1     | 1   |
| 6    | 9   | 1     | 1   |
| 7    | 9   | 1     | 1   |
| 8    | 9   | 1     | 0   |
| 9    | 9   | 1     | 1   |
| 10   | 9   | 1     | 1   |

参加者は、1年生(1年次の授業はすべて終了している)94名である。グルーピングは、入学時より現在までに参加した合宿および授業で同一グループに所属したことがあまりなく、比較的日常生活一緒に行動することの少ない学生同志9名または10名を1グループとし、10グ

Tグループの発達過程に関する研究

表2 実施したプログラムの概要

|       | 第1日                           | 第2日            | 第3日                   | 第4日                  | 第5日              | 第6日                              |
|-------|-------------------------------|----------------|-----------------------|----------------------|------------------|----------------------------------|
|       | 2月26日(月)                      | 2月27日(火)       | 2月28日(水)              | 3月1日(木)              | 3月2日(金)          | 3月3日(土)                          |
| 7:30  |                               |                |                       |                      |                  |                                  |
| 8:00  |                               | 朝のつどい          | 朝のつどい                 | 朝のつどい                | 朝のつどい            | 朝のつどい                            |
|       |                               | 朝食             | 朝食                    | 朝食                   | 朝食               | 朝食                               |
| 9:00  |                               |                |                       |                      |                  |                                  |
| 10:00 |                               | T <sub>3</sub> | T <sub>7</sub>        | T <sub>10</sub>      | T <sub>13</sub>  | 全体会(7)<br>Tグループの<br>ふりかえり(2)     |
| 11:00 |                               | 休              | 休                     | 休                    | 休                | 全体会(8)<br>これからの私                 |
| 12:00 |                               | T <sub>4</sub> | T <sub>8</sub>        | T <sub>11</sub>      | T <sub>14</sub>  | 閉会                               |
| 13:00 |                               | 昼食             | 昼食                    | 昼食                   | 昼食               | 昼食<br>解散                         |
| 14:00 |                               | 自由             | 自由                    | 全体会(4)<br>目かくし<br>探索 | T <sub>15</sub>  |                                  |
| 15:00 | 開会<br>全体会(1)<br>オリエンテ<br>ーション | 全体会(2)<br>無言動作 | 全体会(3)<br>無言の集団<br>作業 | 自由                   | お茶               |                                  |
| 16:00 |                               | 休              |                       |                      | 全体会(5)<br>グループ活動 |                                  |
| 17:00 |                               | T <sub>5</sub> |                       |                      |                  |                                  |
| 18:00 |                               | 休              |                       |                      |                  |                                  |
| 19:00 |                               | 夕食             | 夕食                    | 夕食                   | 夕食               |                                  |
| 20:00 |                               | T <sub>2</sub> | T <sub>6</sub>        | T <sub>9</sub>       | T <sub>12</sub>  | 全体会(6)<br>Tグループの<br>ふりかえり<br>(1) |
| 21:00 |                               | 休              | 休                     | 休                    | 休                |                                  |
|       |                               | 夜のつどい          | 夜のつどい                 | 夜のつどい                | 夜のつどい            | 夜のつどい                            |
| 22:00 |                               | 入浴             | 入浴                    | 入浴                   | 入浴               | 入浴                               |
| 23:00 |                               |                |                       |                      |                  |                                  |
| 23:30 |                               | 消灯             | 消灯                    | 消灯                   | 消灯               |                                  |

Tグループの発達過程に関する研究

|                                   |       |                               |
|-----------------------------------|-------|-------------------------------|
| 1. 不安でたまらない                       | _____ | 安心しておれる                       |
| 2. まさつや葛藤が生じることをおそれていない           | _____ | まさつや葛藤が生じることをおそれている           |
| 3. 誰かに頼っていたい気持ちのみが強い              | _____ | お互いに頼り、頼られていると感じている           |
| 4. グループがいま取組んでいることに関心がある          | _____ | グループがいま取組んでいることに関心がない         |
| 5. 適当な緊張感を感じる                     | _____ | 緊張度が強くなりすぎたり弱くなりすぎたりして苦痛だと感じる |
| 6. 自分の意見や感情をかくして言わないことが多い         | _____ | 自分の意見や感情をかくさずに言うことが多い         |
| 7. お互いに影響しあっている実感がある              | _____ | 特定の人の影響のみが強いと感じている            |
| 8. グループに参加している実感が弱い               | _____ | グループ参加している実感が強い               |
| 9. やればよいと思ったこともできないことが多い          | _____ | やればよいと思ったことはほとんどできる           |
| 10. 何か言うとき、ぼかさないとはっきり言うことが多い      | _____ | 何か言うとき、あいまいにぼかしていうことが多い       |
| 11. 自分の能力がうまくいかされていないと感じている       | _____ | 自分の能力がうまくいかされていると感じている        |
| 12. 活動中グループが何をしているのかわからなくなることが少ない | _____ | 活動中グループが何をしているのかわからなくなることが多い  |
| 13. みせかけをよそおっているようなよそよそしさはない      | _____ | 儀礼的な発言や行動が多くなってしまふ            |
| 14. 特定の人としか話していない                 | _____ | メンバーの誰とでも話せている                |
| 15. 規則・形式にこだわらないで行動できている          | _____ | 規則・形式にこだわってしまっていることが多い        |
| 16. すぐ解決しようとしなくて手こまねいでみている        | _____ | 何か起ったときすぐ解決しようとする             |
| 17. 自分の感情や行動が無視されることが多い           | _____ | 自分の感情や行動が大切にされていると感じた         |
| 18. 自発的に発言・行動する                   | _____ | 求められないと発言・行動しない               |
| 19. 競争的になっている                     | _____ | 協同的になっている                     |
| 20. 自分達でしている感じが強い                 | _____ | 誰かにさせられている感じが強い               |

図1 4つの懸念の測定項目

### Tグループの発達過程に関する研究

ループ編成した(表1参照)。トレーナーとして、学外経験者が1名つき、学内の教員9名もいずれかのグループに参加した。

合宿における日程は、参加者の状況に適したプログラム作りをするために、一日のセッション終了後、トレーナーおよび教員とが毎日話し合うことによつて作成した。実施されたプログラムの概要が表2に示されている。Tグループセッションは全部で15回行なわれた。その他に、実習を中心にした全体会が8回行なわれた。

2 調査項目の作成 信頼関係の形成過程を探る指標として、ギップによる4つの懸念(concern)を測定する項目を、ギップおよび我々の経験的見地から選択し、調査項目を作成した<sup>4)</sup>(図1)。調査用紙は、1対の項目から成り、受容懸念(acceptance-concern)を表わす項目1, 5, 9, 13, 17, データの流動的表出懸念(data-flow concern)を表わす項目2, 6, 10, 14, 18, 目標形成懸念(goal-formation concern)を表わす項目4, 8, 12, 16, 20, 社会的統制懸念(social-control concern)を表わす項目3, 7, 11, 15, 19の各懸念5項目ずつ計20項目で構成されている。

3 調査の手續 調査は、全参加者(94名)に対して、時間的な制約上、1日の最終のTセッション後、すなわち、T<sub>2</sub>, T<sub>6</sub>, T<sub>9</sub>, T<sub>12</sub>, T<sub>15</sub>セッション後、計5時点(以下D<sub>1</sub>~D<sub>5</sub>と略記)において行なわれた。

各参加者は、セッション後「今のグループの中で、あなたはどのようでしたか?」の間に図1に示されている20項目について9段階尺度上で評定が求められた。

### III 結果 および 解釈

各項目とも、懸念の高い方向から9~1の得点を与えた。なお、評定もれの調査用紙については、1時点の20項目のうち、半数以上(10項目以上)回答のあるものには、中間の得点5を与え、半数以下(9項目以下)しか回答のない

---

注)今回用いた項目は、星野欣生(人間関係科)と筆者とで作成したものである。

ものは、その時点の全項目を欠損値扱いとして、以下のような分析を行なった。

1 懸念項目の検討 我々があらかじめ設定した項目が、受容、データの流動的表出、目標形成、社会的統制の4つの懸念を代表するのに適切なものかどうかを、グループ主軸法により検討した。グループ主軸法では、合成変量（各懸念因子）と各項目との相関関係を明らかにしようとするのである。項目のグループわけは、前述したように各懸念を表わすと思われる5つの項目で行なった。表3には、D<sub>1</sub>～D<sub>5</sub>までの全測定値を用いて、20項目間の相関係数を算出し、グループ主軸法による結果が示されている。

表3によると、各合成変量に関してどの項目も比較的高い因子負荷量を示している。一方、表4の合成変量間の相関係数によると、4つの合成変量は相互にかなり高い関連がみられる。特に、受容懸念因子（第I合成変量）は、社会的統制懸念因子（第IV合成変量）と.839で1番高く、他の2つの懸念因子、目標形成懸念因子（第III合成変量）と.804、データの流動的表出懸念因子（第II合成変量）と.788とともにかなり高い相関があることがわかる。一方、データの流動的表出懸念因子と目標形成懸念因子とは相対的に低い相関を示している。ギップはこれら4つの懸念間には相互に関連があることを述べているが、これらの値は予想以上のものと言えるだろう。

以上のことから、受容懸念因子は他の3つの懸念因子と相互に影響し合っており、いわば受容懸念の低減が他の3つの懸念の低減に影響を与えるとも考えられる。このことは、ギップの仮説に妥当性を与えるものと思われる。また、データの流動的表出懸念因子と目標形成懸念因子とは比較的独立していることが理解できる。

次に、表3では全体的に高い因子負荷量が示されていることより、便宜上、.700以上という基準を設けて、4つの合成変量と各項目との関連について検討する。

第I合成変量は、受容懸念因子として指定したのであるが(項目1, 5, 9, 13, 17), それに含まれる項目5にはあまり高い負荷量が示されていない。受容懸念因子に指定されなかった項目8に.709といった高い負荷が見られる。この

Tグループの発達過程に関する研究

ことは受容懸念が高いことが「グループに参加している実感が弱い」意味内容の状況を含むと考えられる。

第II合成変量は、データの流動的懸念因子として指定した項目群（項目2，

表3 グループ主軸法による合成変量の構造

| 項 目                              | 合 成 変 量 の 構 造 |      |      |      |
|----------------------------------|---------------|------|------|------|
|                                  | I             | II   | III  | IV   |
| 1. 不安でたまらない                      | .788          | .596 | .634 | .723 |
| 5. 緊張感が強くなりすぎたり弱くなりすぎたりして苦痛だと感じる | .569          | .348 | .442 | .438 |
| 9. やればよいと思ったこともできないことが多い         | .827          | .754 | .659 | .697 |
| 13. 儀礼的な発言や行動が多くなってしまふ           | .816          | .640 | .688 | .656 |
| 17. 自分の感情や行動が無視されることが多い          | .702          | .547 | .548 | .582 |
| 2. まさつや葛藤を生じることをおそれている           | .540          | .644 | .522 | .514 |
| 6. 自分の意見や感情をかくして言わないことがある        | .675          | .808 | .594 | .588 |
| 10. 何か言うとき、あいまいにぼかしていることが多い      | .614          | .803 | .535 | .585 |
| 14. 特定の人としか話していない                | .492          | .655 | .494 | .542 |
| 18. 求められないと発言・行動しない              | .567          | .754 | .542 | .528 |
| 4. グループがいま取組んでいることに関心がない         | .505          | .430 | .727 | .513 |
| 8. グループに参加している実感が弱い              | .709          | .690 | .831 | .672 |
| 12. 活動中グループが何をしているのかわからなくなることが多い | .531          | .452 | .669 | .499 |
| 16. すぐ解決しようとしなくて手をこまねいてみている      | .485          | .507 | .593 | .418 |
| 20. 誰かにさせられている感じが強い              | .671          | .559 | .794 | .649 |
| 3. 誰かに頼っていたい気持のみが強い              | .659          | .655 | .602 | .770 |
| 7. 特定の人の影響のみが強いと感じている            | .593          | .510 | .581 | .753 |
| 11. 自分の能力がうまくいかされていないと感じている      | .592          | .533 | .483 | .667 |
| 15. 規則・形式にこだわってしまっていることが多い       | .662          | .581 | .622 | .744 |
| 19. 競争的になっている                    | .472          | .367 | .422 | .621 |

注) ゴチック体の数値は .700以上の負荷量を示す。

Tグループの発達過程に関する研究

表4 4つの合成変量間の相関係数

| 合成変量               | I     | II    | III   | IV    |
|--------------------|-------|-------|-------|-------|
| I (受容懸念因子)         | 1.000 |       |       |       |
| II (データの流動的表出懸念因子) | .788  | 1.000 |       |       |
| III (目標形成懸念因子)     | .804  | .730  | 1.000 |       |
| IV (社会的統制懸念因子)     | .839  | .748  | .766  | 1.000 |

6, 10, 14, 18) から成るが、項目9にも.754と高い負荷量を示している。このことは、データの流動的懸念の高まりは「やればよいと思ったこともできないことが多い」といった状況を含んでいると考えられる。

第III合成変量は、目標形成懸念因子を表わす項目群（項目4, 8, 12, 16, 20）を指定したものであるが、項目12, 16は因子負荷量が比較的低かった。.700以上といった規準においては、それより高い負荷を示す項目は見られなかった。

第IV合成変量は、社会的統制懸念因子として指定したのであるが（項目3, 7, 11, 15, 19）、項目1にも.723といった高い負荷量を示している。このことは社会的統制懸念が高いことが「不安でたまらない」という状況を含んでいると考えられる。

以上のことより、我々の用いた調査項目では、ギップの述べる4つの懸念が明確な独立次元としては解釈されなかったのである。しかしながら、各因子に関して、特に高い因子負荷量を示す3項目を各懸念因子の代表項目として取り上げ、分析を進めることにする。すなわち、受容懸念因子では、

項目1：不安でたまらない

項目9：やればよいと思ったこともできないことが多い

項目13：儀礼的な発言や行動が多くなってしまう

データの流動的表出懸念因子では、

項目6：自分の意見や感情をかくして言わないことがある

項目10：何か言うとき、あいまいにぼかしていることが多い

項目18：求められないと発言・行動しない

Tグループの発達過程に関する研究

目標形成懸念因子では、

項目4：グループがいま取組んでいることに関心がない

項目8：グループに参加している実感が弱い

項目20：誰かにさせられている感じが強い

社会的統制懸念因子では、

項目3：誰かに頼っていたい気持ちのみが強い

項目7：特定の人の影響のみが強いと感じている

項目15：規則・形式にこだわってしまっていることが多い

以上の各懸念3項目である。

2 懸念の推移 前述の各懸念3つの代表的項目の合成得点を用いて、時点をコミにし、各懸念ごとに平均と標準偏差を算出したのが、表5である。平均値を見ると、受容懸念と社会的統制懸念が高く、次いで、データの流動的表出懸念であり、一番低いのが目標形成懸念である。

表5 4つの懸念の合成得点の平均と標準偏差

|       | 受容懸念  | データの流動的表出懸念 | 目標形成懸念 | 社会的統制懸念 |
|-------|-------|-------------|--------|---------|
| MEAN  | 13.45 | 12.70       | 11.10  | 13.43   |
| S. D. | 5.57  | 5.55        | 5.36   | 5.21    |
| N     | 430   | 430         | 430    | 430     |

しかし、いま4つの懸念間において、全体量として懸念には差がないと仮定し、懸念間の比較を可能にするために、各懸念ごとに、時点をコミにしたデータ内(N=430)で、平均0、標準偏差1.00に標準化し、それらの得点でもって懸念の推移について検討を行なう。

1) 全体的特徴 グループをコミにし、時点別、懸念別に、各懸念の標準得点の平均値をプロットしたのが図2である。

図2より、全体的に4種の懸念得点は時点を追うごとに減少しており、特にD<sub>3</sub>からD<sub>4</sub>、D<sub>4</sub>からD<sub>5</sub>と経過するに従い傾きが大きくなっている。すなわち、Tセッションが終りに近づくにつれて加速度的にどの懸念も解消されていくと

## Tグループの発達過程に関する研究

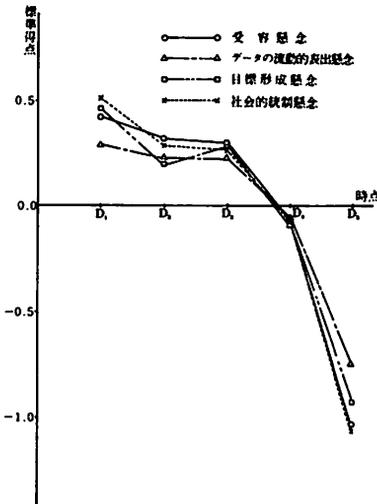


図2 4つの懸念の平均標準得点の変化 (全体)

言えるだろう。このことは、ギップによる仮説を支持している。

懸念間での推移の差異はあまり見られないが、初期においては比較的、データの流動的表出懸念は低く、D<sub>5</sub>においては高くなっている。また、目標形成懸念および社会的統制懸念は、D<sub>1</sub>からD<sub>2</sub>で相対的に減少量が多いことがわかる。

仮に解釈をしてみるならば、データの流動的表出懸念の特徴は、人間関係科の通常授業が学生間の話し合いを中心に進められているため、学生相互がかなり顔見知りになっているという特殊性に影響

されているようである。すなわち、Tセッションの初期にはメンバーとコミュニケーションを行なうことに困難をあまり感じていないようである。しかし、Tグループ体験を重ねるにつれて、話題を中心としたコミュニケーションから今ここでの自分の感情や意見を言ったり、他者にフィードバックを行なうことなどが意識化され、その困難さを認識していくと考えられる。また、目標形成懸念と社会的統制懸念については、彼らが必修科目として参加することが義務づけられていることから理解される。すなわち、第1日目においては学生自身が主体的な目標を持たずに参加し、またTグループの体験は教員によってさせられているといった感じを持って参加していると考えられる。そして、2日目においては自分なりに何らかの目標を見い出しながらTグループセッションに取りくんでいくようである。

2) グループによる特徴 次にグループごとの懸念の推移について検討する。図3はグループごとに4つの懸念の平均標準得点をプロットしたものである。全体的には、Group 5を除いてどのグループも4つの懸念ともD<sub>1</sub>よりもD<sub>5</sub>において低減している。しかしながら、懸念が解消されていく過程はグルー

### Tグループの発達過程に関する研究

ブによりかなり異なるようである。ギッブが、「受容の次元における動きがあつてこそ、はじめて他の3つの次元における意味ある永続的な懸念低減の運動が可能になる」<sup>14</sup>と述べていることから、まず、D<sub>1</sub>からD<sub>2</sub>での受容懸念の変化でもって大きく2つに分けてみることにする。すなわち、一方は受容懸念が増加するグループとして、Group 3, Group 7, Group 8, Group 9, Group 5, (図3-1, -2, -3, -4, -5参照) もう一方は低減するグループとして、Group 1, Group 10, Group 2, Group 6, Group 4, (図3-6, -7, -8, -9, -10参照)である。以下では、グループの特徴的パターンを見ながら、Tグループ合宿終了後学生達がTグループ体験をまとめたグループレポートによる表現を引用し、解釈を試みる。

増加傾向グループの中にあつて、とりわけ Group 3 と Group 7 が類似のパターンを示している。両グループとも、初期において受容懸念はじめ他の懸念が極度に高まり、D<sub>3</sub>からD<sub>5</sub>にかけて急激に減少している。しかし、相異点はD<sub>3</sub>において見られる。Group 3では受容懸念とともに目標形成懸念は高くなるが、データの流動的表出懸念が低減されているのである。一方、Group 7では目標形成懸念が著しく低減し、社会的統制懸念が高い状態にある。

Group 3のグループレポートによると、T<sub>9</sub>(D<sub>3</sub>の測定直前)セッションでは「存在感」について話し合っており、トレーナにより今ここでの問題へ焦点づける介入がある。学生の表現を引用すると、そのことに対して「非常にショックを受けるが、では何をすればいいのかという白紙の状態に戻る」と書かれている。このように、Group 3ではメンバー間のコミュニケーションが比較的行なわれるが(データの流動的表出懸念の低減)、一方で何をすればよいかわからなくなるといった目標形成懸念の高まりが理解される。

Group 7は、T<sub>8</sub>セッションとT<sub>9</sub>セッションと各自について話し合おうとしているが、一部の人しか話さなかったと記録にあり、学生の表現によると「言いがたない」状態と書かれている。このグループは、目標に向かってグループ

---

注) Gibb, J. R. (1963) 邦訳のp.368

### Tグループの発達過程に関する研究

が動こうとするが(目標形成懸念の低減)、メンバーの自発的な動きが見られないようである(社会的統制懸念の高まり)。

このように、両グループは懸念の全体的推移は類似しているようだが、D<sub>3</sub>においてはかなり質的に異なる様相を示している。

Group 8と Group 9は比較的類似しているパターンだが、Group 8では、D<sub>3</sub>において受容懸念と社会的統制懸念が低減しているが、他の2つの懸念が相対的に高く、特に目標形成懸念が増加しているのが特徴的である。Group 9では、D<sub>2</sub>において目標形成懸念を除いた他の3つの懸念が高まっているが、D<sub>3</sub>、D<sub>4</sub>、D<sub>5</sub>において4つの懸念ともほぼ一定の速度で低減している。

Group 8の記録によると、T<sub>8</sub>セッションで「グループの雰囲気はとてよくなった。そして、今ここに存在していることの重要性がわかり始めた」と書かれている。しかし、T<sub>9</sub>セッションで「言葉の重要性について話し出したが、話に熱が入らず」、ここで何をしているのかが疑問になってきている。このように、受容懸念および社会的統制懸念が低減する中で、グループの目標が問題化されていっているようである。

Group 5は受容懸念が増加する傾向を示すグループの中では特異なタイプである。D<sub>1</sub>からD<sub>4</sub>まで受容懸念は高まるばかりであり、他の3つの懸念もその傾向にある。また、D<sub>1</sub>においては一番低かった目標形成懸念がD<sub>4</sub>において極度に高まっている。

学生の記録によると、D<sub>1</sub>は「意欲満々活動期」、D<sub>2</sub>は「動乱期」、D<sub>3</sub>は「たるみ期」、D<sub>4</sub>は「無関心・戦乱期」、D<sub>5</sub>は「あせり・あがき・あきらめ期」とみずからのグループの推移を表現している。何故このグループが「あきらめ」の気持ちになるに至ったかはより詳細な分析が必要だろう。ただ、D<sub>2</sub>からD<sub>3</sub>のデータの流動的表出懸念の低減は、記録によるとT<sub>3</sub>セッションは芸能界等を話題とした「雑談のもとで終わる」とあり、そうした表面的なかかわりが反映されているようである。そして、D<sub>4</sub>からD<sub>5</sub>において深くかかわっていく動きが見られるが、そのメンバーを拒否する者もあらわれる状態で終結しているようである。

D<sub>1</sub> から D<sub>2</sub> の間で受容懸念が低減するグループでは、Group 4 を除いて、多少様相は異なるが D<sub>3</sub> もしくは D<sub>4</sub> において、一度低下した4つの懸念が再び増加の傾向を示している。

Group 1 と Group 10 は変化のパターンでは類似しており、4つの懸念とも D<sub>3</sub> において増加し、D<sub>4</sub> では急激に低減され、D<sub>5</sub> において比較的わずかの減少傾向が見られる。ただし、相対的に Group 10 より Group 1 の方が懸念が高いようである。

資料の都合上、Group 1 について考えると、D<sub>1</sub> から D<sub>2</sub> にかけては、アルバイトの話しが続き、「現在と未来」の話しに発展し、D<sub>3</sub> でトレーナにより介入があり、今ここでの問題に直面することになるようである。そのことが懸念を増大させているのであろう。D<sub>4</sub> では感情レベルの話しがすすみ、「感じたことを卒直に」言い合えるようになっていったようである。

Group 2 と Group 6 では変化のパターンは多少異なるが、一度低減された受容懸念が、Group 2 では D<sub>4</sub> において、Group 6 では D<sub>3</sub> と D<sub>4</sub> において、他の3つの懸念と比較して高い値を示しており、D<sub>5</sub> において急激な減少傾向が見られる。

Group 2 では、記録によるとお互いにフィードバックすることが初期から話題になり、D<sub>1</sub> から D<sub>3</sub> までに「意見を出さなくてもみんな参加している気持ちになれた」と書かれているが、一方では「抵抗もあたりさわりもなく話しが進み、これでフィードバックと言えるのか疑問だ」とも記されている。そして、D<sub>4</sub> では「再び皆がバラバラになってしまうのではないかと心配した」とある。

Group 6 では、D<sub>2</sub> でグループが2つに分かれ、今のグループの状況について話し合われる。記録によると「グループの方向が少し見えだした」とある。D<sub>3</sub> では、グループのメンバーそれぞれに目が向けられ、自分の今気になっていることを伝え合っている。その中であって、気になっているメンバーにかかわっていこうとするが、そのメンバーが受け入れない状態で T<sub>9</sub> セッション (D<sub>3</sub>) が終わっている。D<sub>4</sub> でもそのことにメンバー全員が直面し、解消するための持続的な試みのあったことがうかがえる。

### Tグループの発達過程に関する研究

このようにみてくると、この両グループは  $D_1$  から  $D_2$  にかけて、今ここで問題を自由に話し合う中で、メンバーの1人1人を受容することが最大の問題になり、それを解決するためにメンバーが努力している。そして、その解消が、 $D_5$  での4つの懸念の急激な低減に結びついていると考えられる。

Group 4 は、前述のいずれのパターンにも含まれないものである。このグループは、初期と後期に4つの懸念が低減しているが、 $D_2$  から  $D_4$  においては変動があまりみられない。ただし、目標形成懸念に関しては  $D_2$  から  $D_3$  において減少している。いわば、Group 4 は比較的葛藤の少ないグループであったと考えられる。

3 満足度について 合宿終了直後、Tグループ体験にどの程度満足したかを7段階尺度上で評定してもらった。表6は、満足度の高い方向から7~1の得点を与え、グループごとに平均、標準偏差を算出した結果である。

満足度が1番高いグループはGroup 2である。Group 2における懸念の推移を見ると、 $D_1$ 、 $D_2$ 、 $D_3$  と4つの懸念が低減していくが、 $D_4$  において受容懸念が他の3つの懸念よりも高くなり、 $D_5$  で急激に4つの懸念とも低減している。 $D_4$  で葛藤が生じ、 $D_5$  でそれを解消したことが、大きく満足度に影響したのではないかと考えられる。また、Group 7では初期に高まった懸念が  $D_4$ 、 $D_5$  と

表6 グループごとの満足度の平均と標準偏差

| GROUP    | MEAN | S. D. | N  |
|----------|------|-------|----|
| Group 2  | 6.90 | 0.30  | 10 |
| Group 7  | 6.78 | 0.42  | 9  |
| Group 6  | 6.56 | 0.56  | 9  |
| Group 8  | 6.56 | 0.68  | 9  |
| Group 10 | 6.50 | 0.71  | 8  |
| Group 1  | 6.20 | 0.40  | 10 |
| Group 3  | 6.10 | 0.83  | 10 |
| Group 9  | 5.78 | 0.63  | 9  |
| Group 4  | 5.50 | 1.02  | 10 |
| Group 5  | 4.67 | 1.83  | 9  |

急激に低減されることにより、満足度が高くなったと解釈される。

また興味深いことは、Group 9が比較的満足度が低いことである。Group 9では、 $D_1$  から  $D_4$  と序々に懸念が低減し、 $D_5$  で大きく減少している。単に懸念の低減量が満足度に比例するならば、このグループはもっと高い満足度を示してもいいのではないだろうか。

これらのことより、単なる懸念の低減だけではなく、グループの中で何らか

## Tグループの発達過程に関する研究

の重大な葛藤に直面し、それに向ってメンバーが相互にかかわり、葛藤を解消することが高い満足度へつながると考えられるだろう。その意味においては、懸念が高まり、それが低減されるパターンを持つ Group 6, Group 8, Group 10, Group 1, Group 3 が比較的高い満足度を示していることは理解できるだろう。また、前述の Group 9, および Group 4 では4つの懸念が比較的一定速度で減少することから、大きな葛藤に直面しなかったことも予想され、これらのグループの低い満足度を理解することができるだろう。一方、Group 5 の一番低い満足度については、Group 5 ではグループに生じた葛藤を解消しえずに終結しており、そのことにより満足度が低くなったと考えられる。

### IV 全体的考察

既に見たようにTグループの全体的傾向としては、ギップの仮説のように4つの懸念が低減される方向へとグループは動いていくことが明らかになった。しかし懸念低減のヒエラルキーに関してはここでの分析では明らかにすることが出来なかった。むしろ興味深かったのはグループ別の分析であり、そこで集団発達のいくつかのパターンが確認されたことである。第一のタイプは次第に懸念が強まってゆき、ある時点から急激に懸念の減少がおこるタイプで、最初からの葛藤が比較的早い時点で克服されて懸念の低減のはじまる場合（例えば Group 3, 7）と葛藤が長く続き懸念を充分低減できずに終る場合（Group 5）とが含まれていた。第2のタイプは最初次第に懸念を減少してゆくか、ある時点で葛藤に遭遇して再び懸念が増大し、やがて葛藤を克服して懸念を低減させて終るタイプ（Group 1, 10, 2, 6や8）。第3のタイプは比較的坦々と懸念が減少してゆき、途中であまり大きな葛藤に直面しなかったと考えられるタイプ（Group 4, 9）であった。

第1のタイプのグループでは、葛藤の存在が懸念を増大しつづけ、ついには劇的な状況の転換によって葛藤の克服が実現されるようである。時には克服に失敗することもあり、比較的リスクの大きいグループ展開といえそうである。第2のタイプはもっとも多く見られるタイプで、一旦懸念の減少が起った後で

### Tグループの発達過程に関する研究

の葛藤との遭遇であるためその克服（懸念の低減）にはよく成功している。このタイプは該当するグループ数も多く、標準的なグループ展開といえそうである。第3のタイプは懸念そのものの低減には成功するが達成感がやや乏しく、波乱の少ない落ちついたグループ展開といえる。

こういったタイプのちがいはTグループの効果性とは全く関係のないことをはっきりさせておく必要があるだろう。逆説的に言えばどのようなグループ展開であっても効果的であり得るのがTグループである。というのは教育としてのTグループは、そこでのグループ体験と「ふり返り」による体験の一般化とが必要不可欠の要素であり、一般化をも含めてその効果が測られる必要があるからである。大学でのTグループの場合、Tグループ終了後に一般化のための時間は充分あるのだが、その成果はこれまでのところあまり充分とは言えない。Tグループ体験の一般化のプログラム等については今後の研究課題としておきたい。

次に、本研究で用いた測定尺度の因子分析の結果は、4つの懸念間の相関が非常に高く因子論的に言えば、一因子性が非常に強いことが明らかになった。これは良い意味ではギップの言う懸念間の相互依存性が非常に高いことのあらわれともとれるが、逆にギップの4つの懸念の設定そのものの妥当性も問われるかもしれない。さらに測定尺度の作成上の不備も挙げられる。しかし、不十分な尺度にもかかわらず4つの懸念の変動の差異が実際のグループ展開の解釈を可能にしている部分もあり、より鋭敏な懸念測定尺度を構成することによって、ギップの仮説はよりよく証明されるものと考えられる。ここではギップの仮説から離れて、この20尺度を用いて大学生の反応の特徴を考察してみることにする。

全測定時のデータをまとめて主因子法により因子分析し、バリマックス回転した後の因子負荷行列を表7に示した。固有値1.0以上で3因子が抽出されたが、第1因子は全分散の86.7%を説明する大きな因子である。「規則・形式にこだわってしまっていることが多い」「儀礼的な発言や行動が多くなってしまおう」「誰かにさせられている感じが強い」などが負荷量の大きい項目で、「コミットメント——形式的」と名づける。第2因子は「求められないと発言しない」「や

Tグループの発達過程に関する研究

表7 20尺度の因子負荷行列表(主因子法—バリマックス回転)

| 項 目                              | 因 子 負 荷 量 |      |      |
|----------------------------------|-----------|------|------|
|                                  | I         | II   | III  |
| 15. 規則・形式にこだわってしまっていることが多い       | .678      | .299 | .130 |
| 13. 儀礼的な発言や行動が多くなってしまふ           | .651      | .406 | .157 |
| 20. 誰れかにさせられている感じが強い             | .648      | .287 | .244 |
| 1. 不安でたまらない                      | .598      | .318 | .345 |
| 7. 特定の人の影響のみが強いと感じている            | .566      | .212 | .319 |
| 12. 活動中グループが何をしているかわからなくなることが多い  | .565      | .168 | .184 |
| 2. まさつや葛藤が生じることをおそれている           | .510      | .272 | .171 |
| 18. 求められないと発言・行動しない              | .182      | .767 | .117 |
| 9. やればよいと思ったこともできないことが多い         | .411      | .692 | .241 |
| 6. 自分の意見や感情をかくして言わないことがある        | .344      | .674 | .170 |
| 10. 何か言うとき、あいまいにぼかしていることが多い      | .400      | .568 | .127 |
| 8. グループに参加している実感が弱い              | .519      | .524 | .267 |
| 16. すぐ解決しようとししないで手をこまねいてみている     | .209      | .506 | .169 |
| 11. 自分の能力がうまくいかされていないと感じている      | .255      | .505 | .286 |
| 19. 競争的になっている                    | .229      | .143 | .642 |
| 17. 自分の感情や行動が無視されることが多い          | .248      | .425 | .521 |
| 3. 誰れかに頼っていたい気持のみが強い             | .480      | .452 | .277 |
| 4. グループがいま取組んでいることに関心が無い         | .456      | .204 | .323 |
| 5. 緊張感が強くなりすぎたり弱くなりすぎたりして苦痛だと感じる | .440      | .209 | .083 |
| 14. 特定の人としか話していない                | .394      | .276 | .331 |
| 説明される分散(%)                       | 86.7      | 8.4  | 4.9  |

注)ゴチック体の数値は.500以上の負荷量を示す。

ればよいと思ったことでもできないことが多い」「自分の意見や感情をかくして言わないことがある」に負荷量が高く、『行動化——不自由』と名づける。第3因子は全分散に占める比率も少ないので、残余として解釈しないでおく。

## Tグループの発達過程に関する研究

ここで認められた「コミットメント」と「行動化」とは学生特有の懸念といえるかもしれない。ギップの4つの懸念は純粋に相互作用場面で生起する懸念といえるが、ここで見出した2つの懸念は、学習の場に臨む時の学生に特有の態度的・文化的懸念といえそうである。コミットメントの懸念は、先輩の話ではこわい合宿のようだ」「授業だから真面目な顔をしなければ」といった恐怖や不信頼に由来するもので、形式的な参加態度や、出来事や人間を対象化してながめる態度を生み出す。この懸念が解消されると、自分とのかかわりで事態や人を見るようになり、学習の場に意味を感じて主体的に取り組むようになる。共同体形成の重要な側面でもある。

行動化の懸念は「よい子ぶっていると見られるのではないか」「やったら良いと思うけど、そこまでしなくても」といった恐怖や不信頼にもとづくもので、学生特有の自意識と無責任とから生じる不自由さを生み出す。この懸念が解消すると、自信を持って事態に働きかけることや、責任ある態度が可能になると思われる。

おそらくこれらの懸念の解消が、Tグループでリアルにグループ場面の学習をするための基礎条件になるのだろう。人間関係科でのTグループの効果性は、実にこの懸念の低減ということにあるのかもしれない。事実Tグループを終えて学生達は「やっと人間関係科の目ざしているものがわかった」とか「いままでやめたいやめたいと思っていたけれど、人間関係科が好きになった」などとよく言う。これはTグループが対人関係の学習の場となる以前に、学習の場と自分との関係づけに寄与しており、学習の前提条件を整えるという意味でも、これらの懸念の存在を認識したグループへの介入が必要なかもしれない。

## V 要 約

ギップの仮説にもとづくTグループの発達過程を検討するために、懸念測定尺度を作り学生のTグループで実施した。結果は、Tグループの発達とともに4つの懸念が低減することが確認された。同時にTグループの発達過程に3つのタイプがあることが確認され、その特徴が検討された。尺度の再分析の結果

### Tグループの発達過程に関する研究

から、学生が学習の場に臨む時に特有の懸念（コミットメントと行動化）のある事を発見し、その考察を行なった。

#### 〔引用文献〕

- Bennis, W. G., Tグループ発達の様式とその変遷, In Bradford, L. P. et. al. T-Group Theory and Laboratory Method, 1964, John Wiley & Sons, Inc. (邦訳) 三隅二不二監訳, 感受性訓練, 第9章, 1971, 日本生産性本部
- Bradford, L. P., メンバーシップと学習過程, In Bradford, L. P. et. al. T-Group Theory and Laboratory Method, 1964, John Wiley & Sons, Inc. (邦訳) 三隅二不二監訳, 感受性訓練, 第7章, 1971, 日本生産性本部
- Gibb, J. R., 信頼関係形成のための風土, In Bradford, L. P. et. al. T-Group Theory and Laboratory Method, 1964, John Wiley & Sons, Inc. (邦訳) 三隅二不二監訳, 感受性訓練, 第10章, 1971, 日本生産性本部
- 星野欣生, 山口真人, 大学教育へのTグループ適用の試み—教育の変革を求めて—, 南山短期大学紀要, 1979, 7, 59-99.
- 柏木繁男, 核因子マトリックスによるTグループの学習動機の変動の解析, 心理学研究, 1969, 40, 1-11.
- 篠原弘章, 討議集団における会合雰囲気の測定 (I), 熊本大学教育学部紀要, 1974, 23, 183-193

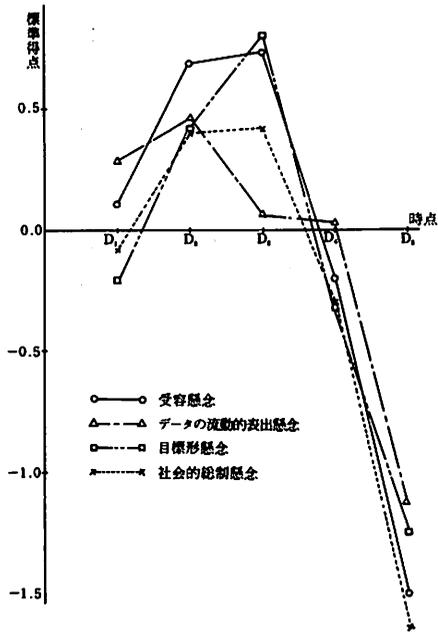


図 3 - 1 4つの態念の平均標準得点の変化 (Group 3)

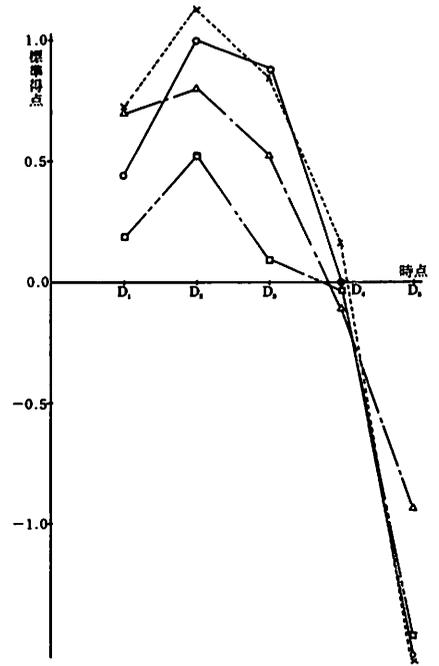


図 3 - 2 (Group 7)

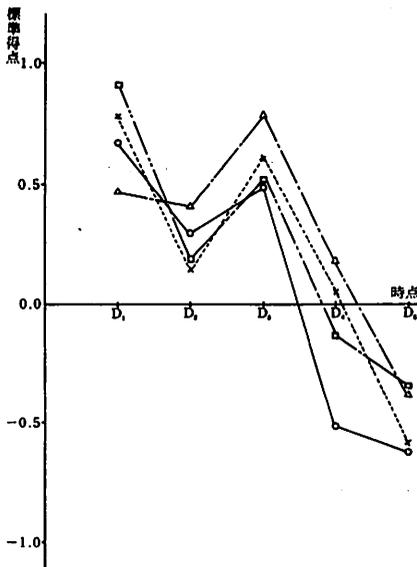


図 3 - 6 (Group 1)

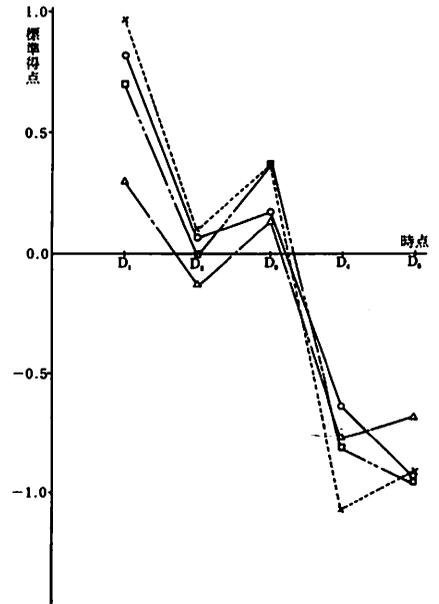


図 3 - 7 (Group 10)

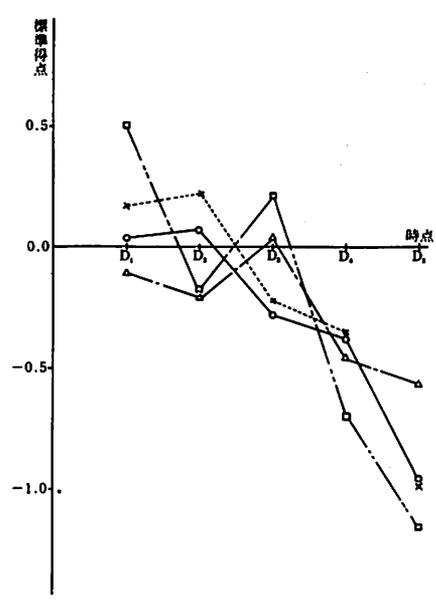


图 3-3 (Group 8)

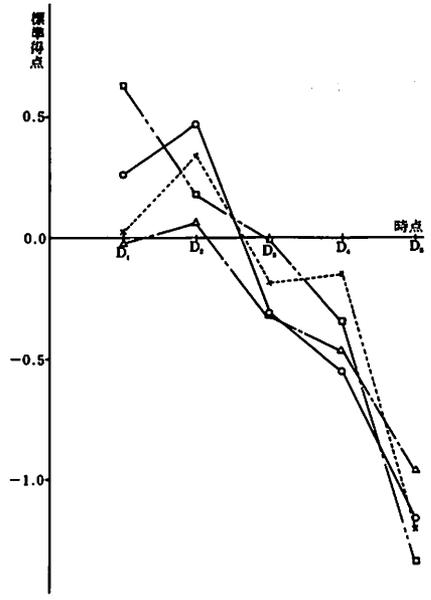


图 3-4 (Group 9)

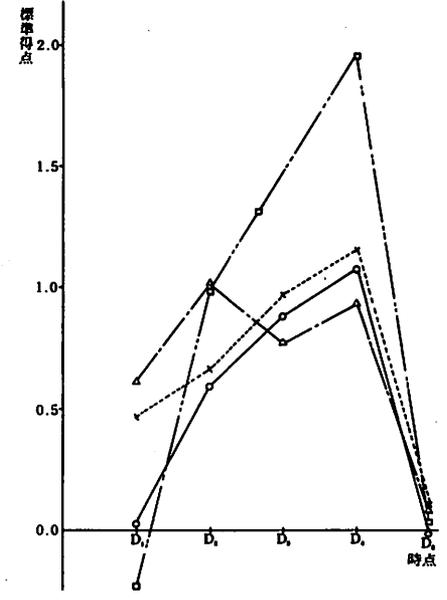


图 3-5 (Group 5)

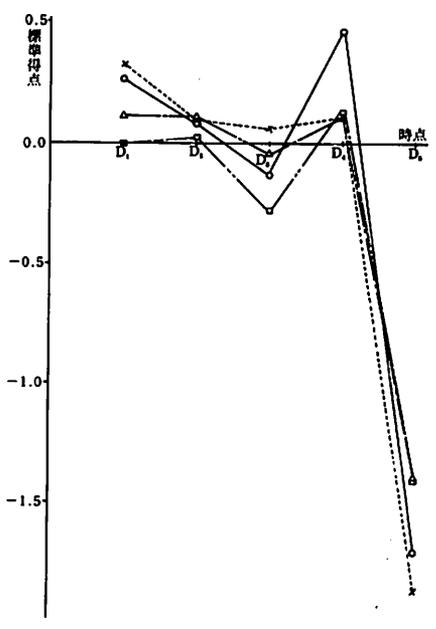


图 3-8 (Group 2)

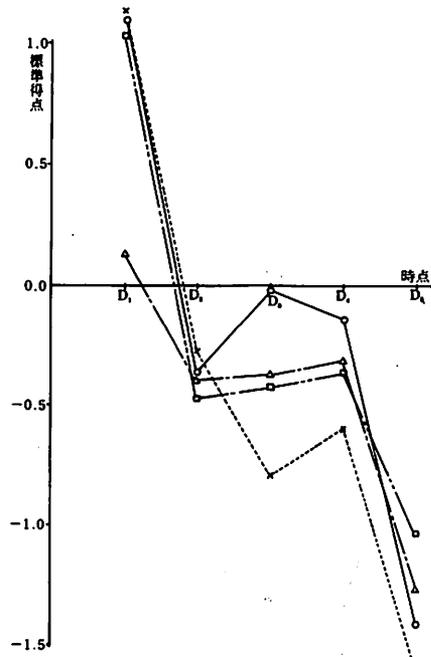


图 3-9 (Group 6)

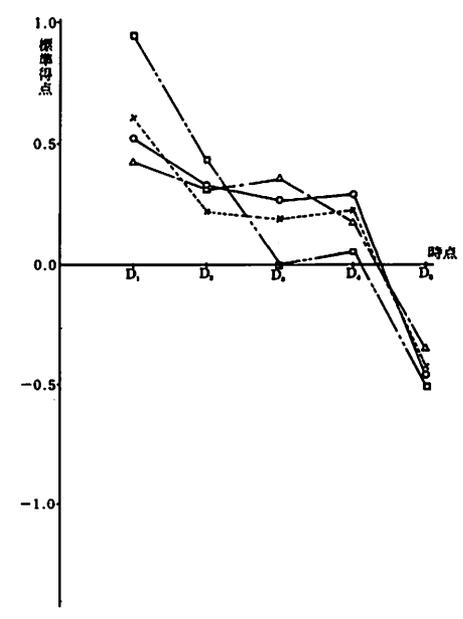


图 3-10 (Group 4)